KOBE GAKUIN UNIVERSITY
神戸学院大学　総合リハビリテーション学部
作業療法学科
教授　小川　真寛（OGAWA Masahiro）

■ テーマ名
活動の質評価法（A-QOA）の開発、普及、臨床適応

■ キーワード
活動の質、QOL、作業療法、評価、認知症

■ 研究の概要
認知症等の疾患により記憶力や判断力の低下に伴い、自身の思いやニーズを言語化することが困難となります。そのため施設や病院のケアスタッフは、認知症の人にどのような活動をどのように提供することが健康や幸福を促進するかを明確に捉えられず、日々迷いながら活動を提供している状態があると思います。そのため我々はこれまで認知症の人が活動を行っている様子を観察から、活動の質（Quality of Activities）を評価するツールである（A-QOA：アコア）を作成してきました。

A-QOA は活動との関係や言語、感情表出、そして対人交流の側面などから構成された21項目の観察項目があり、多面ラッシュモデルを利用し専用に開発したソフト（AqoaPro）を用いることで、測定した結果を正規化されたデータに変換することが可能です。そのため、実際の施設や病院など様々な場面で行われる活動が対象者に良い影響をもたらしているかということを、比較、分析することが可能です。これにより、施設や病院で行われる活動の選択や援助方法の検討や効果判定ができるようになり、ケアやセラピーの質の向上に寄与する可能性があります。
（A-QOA のホームページ：https://www.a-qoa.com/）

■ 他の研究／技術との相違点
今までの同様の評価法は回想法やスヌーズレンといった特定の活動を評価するために作られているが、A-QOA は活動の制限がない。そして、過去の評価は認知症ケアマッピング（DCM）など５分間ごとのタイムフレームで観察する評価が多いが、A-QOA はタイムフレームに依存せず、短時間の活動でも評価が可能です。そして、A-QOA の最大の特徴は、最終的に正規化され数値化させることにあり、これにより活動や支援方法の違いが活動にどのような影響を与えているかを統計学的に比較検討できることです。

■ 今後の展開、実用化へのイメージ
A-QOA を用いることで、意思表出の困難な方への活動提供が与える影響が調べられます。したがって、今後の展開としては、
- A-QOA を用いることで、活動の提供が行動心理症状にどのように影響するのかの検証
- 介護保険等の施設（デイケア、デイサービスなど）で行われる活動の効果検証
- 特定の活動（レクリエーション、音楽療法、料理など）がもたらす効果の検証
- 認知症以外の疾患での評価法の適応

などを考えています。

■ 関連業績（特許・文献）
１．小川真寛，白井はる奈，坂本千晶，西田征治：A-QOA ビギナーズガイド　認知症のある人の生活を豊かにする21の観察視点と20の支援のポイント．クリエイツかもがわ，2022.
２．Ogawa M, Shirai H, Nishida S, Tanimukai H: Rasch Analysis of the Assessment of Quality of Activities (A-QOA), an Observational Tool for Clients with Dementia. Am J Occup Ther 2021. 75(1) 7501205040p1-7501205040p9.　DOI: 10.5014/ajot.2021.039917
３．小川真寛, 白井はる奈, 西田征治：活動の質評価法（A-QOA）開発の取り組み．作業療法ジャーナル 54(1), 88 -91, 2020.
４．Ogawa M, Nishida S, Shirai H: A qualitative study to explore ways to observe results of engaging activities in clients with dementia. Occup Ther Int 2017, Article ID 7513875, 8 pages. DOI:10.1155/2017/7513875

■ 研究者から一言
A-QOA は意思表出が困難な方に対して、その人の視点に立って観察を行う評価法であり、パーソンセンタードな視点で評価を行います。研究だけでなく、臨床において臨床で評価や効果検証が困難であった活動の効果を言語化、数値化することで、ケアやセラピーの質の向上を目指していますので、臨床に携わっていらっしゃる方にも興味を持ってもらえればと思います。